

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さん ぼう

三方よし

第48号

2021/12

特別寄稿 多事多難な幕末維新期を 生き抜いた近江商人(後編)

同志社大学名誉教授・近江商人郷土館館長 末永 國紀



表通りの喧騒がうそのような静けさを感じる前庭と史料館



西川の商品がそろそろセレクトショップが新設(右側)

八幡堀に面する大杉町通りの西川甚五郎本宅敷地内に11月14日西川甚五郎本店史料館が開館しました。近江八幡名産とともに、西川の製品を取り揃えたショップも併設され、450年余の西川の歴史を知る新しい名所として期待が集まっています。

西川甚五郎本店史料館

所在地：近江八幡市大杉町14番地
休館日：毎週火曜日
営業時間：10：00～17：00
入館料：無料
お問い合わせ先：TEL.0749-32-2909

多事多難な幕末維新时期を 生き抜いた近江商人(後編)

今日の世界規模のコロナ禍は、すでに足かけ2年におよび、人びとの日常生活の鬱積には、はかり知れないものがある。容易に先の見通せない時代であることが、社会に一層不安や動揺、混乱をもたらしている。

鬱屈の霧に包まれたような近頃の世相を、客観的に映し出す鏡の役割を歴史に求めることは、心の静穏をもたらす一服の清涼剤ともなるであろう。

ほんの170年ほど前の黒船襲来に始まる幕末維新时期は、四半世紀にも満たない短期間に、疫病コレラの蔓延をはじめ多事多難な出来事が次々に突発発生起した。そのなかを生き抜いた先人、近江商人の足跡を史実に則してたどることにしよう。

8 幕末争乱とええじゃないかの狂乱



坂本龍馬(個人蔵/下関市立歴史博物館寄託)



高杉晋作(萩博物館蔵)

禁門の変直後の元治元年(一八六四)七月二三日、朝廷は長州征討の命をくだした(第一次征長)。命を承けた幕府は、西国二藩に出兵を命じ、八月には將軍家茂の進発を布告、一二月一八日を総攻撃の日と決め、総計一五万の軍兵が長州藩境を取り囲んだ。

これに対して、尊攘派の勢力が衰えて佐幕派が藩政を掌握していた長州藩では、謝罪恭順の意を示し、征長総督府の意向を受けて、禁門の変の直接指揮者である三人の家老に自刃を命じ

た。その結果、三家老を犠牲にして、戦火を交えることなく長州藩への攻撃は中止され、征長軍は一二月二七日に撤兵した。

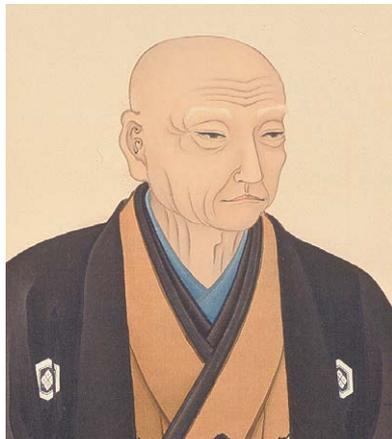
一方、長州藩ではこの直後の元治元年一二月、翌年初めにかけて、高杉晋作らによる大規模な内乱が起こり、これに勝利した討幕派といわれる木戸孝允らの藩政首脳部は、土佐の坂本龍馬を介して西郷隆盛ら薩摩藩と薩長同盟を結び、武備恭順を唱えて抗戦の構えをとった。幕府は長州が容易ならざる企てを図り、外国商人と秘かに取引しているとして再度征長を上奏し、慶応元年(一八六五)九月に勅許を得て、翌二年六月より長州藩軍との戦闘が開始された(第二次征長)。

挙藩体制を固めた長州側に対して、幕府側は、大坂・江戸での打ちこわしや百姓一揆に脅かされ、かつ戦況も不利であった。結局、幕府側は八月二〇日の一四代將軍家茂の大坂城での病没を機に八月休戦、その年の暮一二月二五日の孝明天皇の崩御を契機として、翌慶応三年一月二三日に長州征討は失敗のうちに終わった。

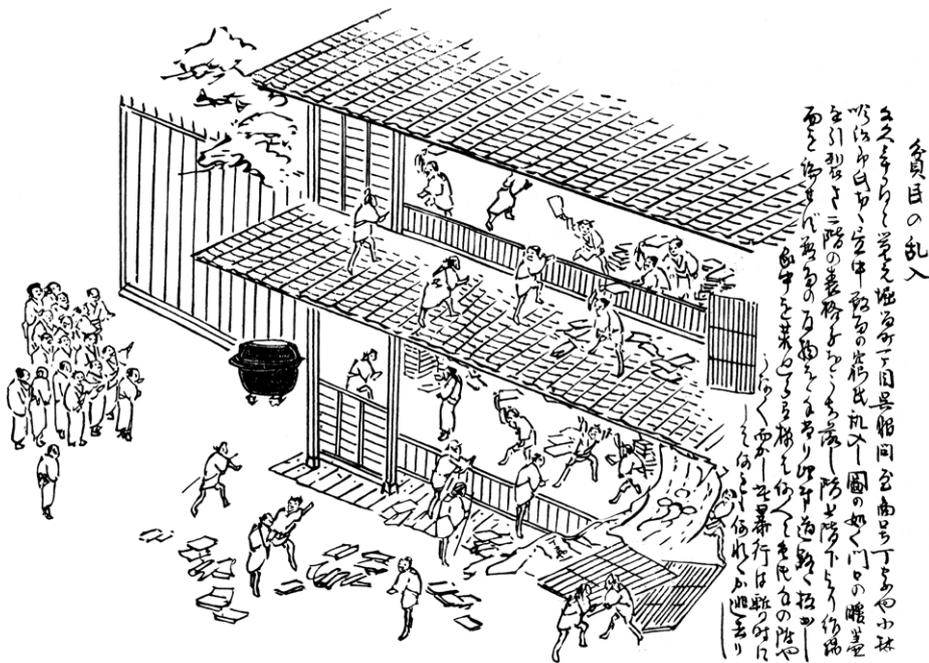
彦根藩領民であると同時に、江戸・京都・大坂の幕領三都に出店し、諸株仲間に加わっている近江商人の丁子屋小林吟右衛門家(以後商号、丁吟、現・チヨーギン(株))は、幕府からの御用金、調達金の賦課にも応分の出金をした。慶応年間になると、幕府への出金は急増した。慶応元年五月三日に、江戸の南町奉行所に呼び出され、三〇〇〇両の御用金を命じられ、それを三回に分けて一〇〇〇両ずつ拠出した。これは第二次征長費の調達であった。

また、大坂で始まった打ちこわしの火が東進した結果、江戸周辺にも引火し、慶応二年五月二八日には江戸の豊島・葛飾や品川宿で打ちこわしが始まった。丁吟江戸店(呉服太物問屋)では、状況を察して前日から近隣の窮民へ施し金を準備していた矢先の六月三日午前一〇時頃に店が襲われ、大勢の見物人が詰めかけた。

発端は、一四〜一五歳ほどの子供がやって来て暖簾をはずして破ったので、店員がこれを制している、にわかに大人数が集まり、騒ぎになった。江戸店では家を荒らされ、商品を往來に持ち出されて、ドブに捨てられたが、店員に怪我人もなく、その



2代目小林吟右衛門 (近江商人郷土館蔵)



丁吟江戸店の打ちこわし (『江戸東京実見画録』岩波文庫より)

日のうちに営業を再開した。そして準備していた救恤用の施し金三二六両を、出店のある堀留や近所の町々の一二八五人へ配布した。この出来事は、人々に強い印象を与え、鹿島万兵衛『江戸の夕映え』や長谷川溪石『美見画録』にも記録されている。

第二次征長が失敗に終わり、幕府の為政者としての権威が失墜した慶応三年(一八六七)夏から翌年春にかけて、世の中のこととはどうでもいいじゃないかという意味のはやし言葉が発しながら、男子が女装し女子が男装しながら狂喜乱舞する、「ええ



ええじゃないか踊り

うって流れ込む事態となった。塚本家では、土足で上がられるのは覚悟の上であり、表三間と納戸、台所の畳を裏返しに敷いた。座敷の中央には箆筒の引出しを積み重ねた壇上に一夜拵えの神殿を建立し、炊事場を設けて赤飯を拵え、三角形にきって

「じゃないか」と呼ばれる独特の狂乱状態が近畿・東海を中心に広範囲にわたって現れた。それは幕末動乱のなかでの、方向性をもたない一種の世直しエネルギーの大衆的爆発であった。

近江商人の塚本定右衛門家は、川並村の本宅に降った天照皇大神のお札にまつわる騒動が次のように伝えられている(『塚本家譜』)。

慶応三年一月二七日の夜、本宅表門付近の屋根に剣形のお札が降っているのを通りがかりの婦人が知らせた。塚本家では、寺子屋師匠川島俊三と医師の塚本主税にのみ知らせ、その夜はお札降下の公表を見合わせ、京呉服問屋に居た当主の二代目定右衛門(定次)へ急使を立てた。

翌朝から「ええじゃないか、く」と近隣の人々が雪崩をうって流れ込む事態となった。塚本家では、土足で上がられるのは覚悟の上であり、表三間と納戸、台所の畳を裏返しに敷いた。座敷の中央には箆筒の引出しを積み重ねた壇上に一夜拵えの神殿を建立し、炊事場を設けて赤飯を拵え、三角形にきって

うず高く盆に盛って供え、酒は薦被りに柄杓をそえて出した。親類の嫁御も出入の若衆もその家々で意匠を凝らした半纏を着ていた。定次は京から持ち帰った友禅縮緬に袖と御幣の交又した半纏を羽織り、赤袴に後ろ鉢巻きの派手姿で、平素の手前、浮かれることもならず、八畳の間に腰を据えて、ただニコニコしていた。踊り込みも終わった深夜、定次は縮緬姿のままに仏前に夕べの読経礼拝を務めた。

三日間のお祭りも済んで、鎮守の森への神送りの段になると、七歳の政七(後の三代目定右衛門)が稚児の扮装をして肩車に乗り、定次・原三・佐兵衛等の旦那衆も仮装をして雪洞や手燭を持って練り歩いた。百鬼夜行のような浮かれ方は、維新前夜の時節ならではの芸当であった。外村与左衛門家、松居久左衛門家等の他の近江商人の豪商の本宅にもお札が降り、同様の乱痴気騒ぎが起きた。

9 メインバンクの倒産と事後処理

京都の両替商伊勢屋藤兵衛と、通称伊勢藤が文久元年（一八六一）一月に突然倒産した波紋を、最大の被害者丁吟に残された史料に基づいて、幕末の目まぐるしい金銀貨幣取引による金融事件と、危機に臨んでの丁吟の二代目吟右衛門の対応を見定めよう。

伊勢藤は、京都の東と西の町奉行所の金銀取扱に従事する一三名の掛屋両替商の一人であり、江戸の塩河岸に出店伊勢屋嘉蔵（伊勢嘉）を持つ京都の有力な両替商であった。

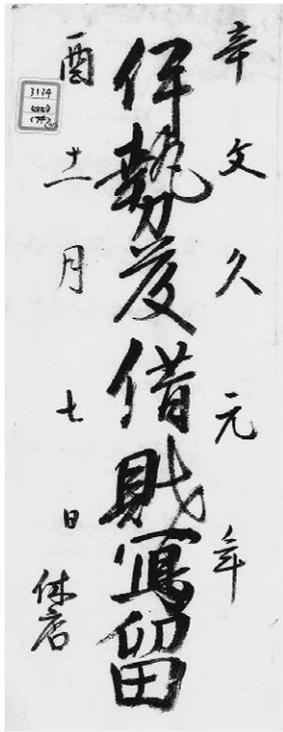
京都麩屋町三条上ルにあったこの伊勢藤が、文久元年一月七日に突然休店した。休店とはいえ、債務超過による事実上の倒産である。続いて同月一日には江戸の伊勢嘉も休店した。伊勢藤倒産時の取引先総数二二

二口のうち、判明する取引先の地域分布は、京都を中心に近江・山城・丹後・大坂の近国四ヶ国に集中している。

しかし、何とんでも伊勢藤との最大の取引先は近江商人であった。

伊勢藤の倒産時の純負債額は、金五二万五三四一兩と銀三六〇七貫三九六匁にも及ぶものであった。そのうち近江商人四七口との取引は、借入が金三七万八八五三兩と銀一三三五貫五九二匁であり、貸付が五万四一〇〇兩と銀七七一貫四七九匁に上っていた。

神崎郡・愛知郡に本宅を有する、外村与左衛門・阿部市郎兵衛・松居久右衛門・小林吟右衛門・塚本武右衛門・小泉新助・松居太七・市田源左衛門・塚本定右衛門・外村宇兵衛・藤井善



「伊勢藤借財写留」（近江商人郷土館蔵）

助・高田善右衛門等の代表的な近江商人がほとんど含まれている。なかでも愛知郡小田村の丁吟（現・近江商人郷土館）と神崎郡位田村の松居久右衛門家の伊勢藤との取引は、群を抜いて多額である。その額は、金貨だけでも丁吟の預け金は一三万三二五一兩に上り、松居久右衛門のそれは一一万兩であった。まさに、近江商人のメインバンクの倒産である。

文久元年一月七日の伊勢藤の休店は、蓄積の大部分を伊勢藤との取引に注ぎ込んでいた丁吟にとっては、大きな衝撃であった。当日巳の刻（午前一〇時頃）に京都から発信された、当年

二月に開店したばかりの両替業務の大坂店宛の書簡は、緊急事件突発を知らせると同時に、事後対策として為替受払を滞りなく行うように繰り返し念を押している。翌八日の大坂店宛の京都からの書簡は、事件当日の京都の様子を「足も萎え、張り合

いもなく、男泣きするしかなく、まったく途方に暮れていた」と伝え、さぞかし大坂店も同様であろうとショックの大きさを正直に吐露している。伊勢藤の倒産によって一二万両余もの貸倒れが明らかになった丁吟に対して、連鎖倒産、経

営危機に見舞われるのではないかと周囲の危惧が高まってきた。一月一六日の京都から大坂店へ当たった書簡では、丁吟の為替取組が不渡りになることを警戒されている状況では、為替取組も無理することなく、暫く見合わせることに、大坂店から送る用意があること、それらに為替の払いも峠を越したので心配には及ばない。先方から為替の取組の依頼があれば適宜に取り計らうように、と申し送っている。

一月二八日には、開設したばかりの大坂店閉鎖のことが本決まりとなった。大坂からの撤退に際して、京都に在店していた二代目吟右衛門は、同じ二八日に自ら筆を執って大坂店の店員へ書簡を送り、大災難に遭った時には事後の措置こそ大切であることを次のように論じた。

大坂店は一時引き払って時節を俟つことにした。大切なことは、外聞にこだわるよりも事後の行届いた手当をすることであり、そうすれば世間の好印象を得る取引に不自由することはない。ここは「立鳥跡を濁さず」ということが肝心である。自

分は幼少時から不慮の災難に出遭ってきたが、その時は慎重に事を処すれば、また商売も自然と回復し手広くなるものなので、この伊勢藤の倒産に際してもこれらのことに思いを巡らすことが大切である。

この時の二代目吟右衛門の年齢は六三歳、半生を賭けた蓄積が水泡に帰したのである。伊勢藤の倒産が多額の振込依頼に応じた直後だっただけに、長年の取引の信頼を裏切られた吟右衛門の憤怒は激しく、内心の無念の思いを手記に遺している。ただし対外的には、泰然として為替の受払や預り金の払戻しに応じ、大坂店の店員に向かって、自己の体験を通して大災難に出遭った時の事後処理の大切さを「立鳥跡を濁さず」と論じた書簡は、迅速で的確な指示であり、世間に対して好印象を与え、丁吟再建の契機となった。

大坂店は一時引き払って時節を俟つことにした。大切なことは、外聞にこだわるよりも事後の行届いた手当をすることであり、そうすれば世間の好印象を得る取引に不自由することはない。ここは「立鳥跡を濁さず」ということが肝心である。自

分は幼少時から不慮の災難に出遭ってきたが、その時は慎重に事を処すれば、また商売も自然と回復し手広くなるものなので、この伊勢藤の倒産に際してもこれらのことに思いを巡らすことが大切である。

この時の二代目吟右衛門の年齢は六三歳、半生を賭けた蓄積が水泡に帰したのである。伊勢藤の倒産が多額の振込依頼に応じた直後だっただけに、長年の取引の信頼を裏切られた吟右衛門の憤怒は激しく、内心の無念の思いを手記に遺している。ただし対外的には、泰然として為替の受払や預り金の払戻しに

10 時代の機先を制するアンテナ

幕末から明治初期にかけての大変革期を、近江商人はどのように対応したのだろうか、神崎郡の五個荘川並を本宅とする塚本定右衛門家(現・ツカモトコーポレーション)の動向を通して見てみよう(『紅屋三翁』)。

この時期、当主の塚本定次(二代目定右衛門)、その弟の塚本正之の兄弟、妹の塚本「さと」の夫の原三を始めとする塚本一統は、商業経営に多忙を極めた。元治元年(一八六四)七月一九日の禁門の変によって京都の六角店



塚本定次(ツカモト資料館蔵)



塚本正之(ツカモト資料館蔵)

は類焼した。その時、店に居合わせたのは、定次、正之、原三を含む一人であった。一同は、部署を定めて倉庫・借蔵の目塗りをしてから五条坂の取引先の尾張安へ避難した。火災は、東の河原町から西は堀川まで、南は東寺辺まで燃え広がって、洛中の大半を焼き尽くして、二二日に鎮火した。

避難先から自店の焼け跡に戻った一同は、焼け残った倉庫と借蔵を開扉し、在庫品の無事を確認して安堵し合った。正之と原三は直ちに立出して草津の定宿野村屋に着いて、在庫品の無事を関東の取引先へ報知した。定次は京店の復旧用材木を大坂に出て買付け、その年一月二七日には六角店を再建できた。その上に同年の秋には、同業者で関東へ持ち下り商いをする者は極めて少なかったため、関東での商いは定右衛門家の独り舞台となり、思いがけぬ大利を得た。

明治二年(一八六九)一月になると時代の大転換を機敏に察して、家業と家内の引き締めを図って塚本一統は、申合せ状を作成した。二代目塚本定右衛門

の名前で作成された「家内申合書」である。前文の大意は以下のようにまとめられる。

「親や先祖からの家業と家名を相続する本来の意義は、奢りと浪費を慎み、勤儉に徹し、立身出世を目指して良友に馴染ながら各自それぞれの任務に励むことに変わりはない。しかしながら、世の人心が動揺すれば商売も成り立たず迷惑を蒙るところを、日本全国どこにおいても遅滞なく商いができるのは、この度成立した明治新政府のお蔭である。よって、時に応じて新政府によって発布される諸規則類を遵守して生業に励まなければならない。」

この前文で注目すべきは、商家の働き方や任務は従来と変わりはないが、日本全国どこにおいても平和裡に商いに従事できるのは明治新政府のお蔭である、と成立したばかりの明治新政府を全国統一権力として、明治二年一月の時点で早々に是認していることである。

次いで、簡潔な項目にまとめられた六箇条の心得るべきそれぞれ箇条には、分かりやすい補説が付けられている。

第一条 「華主の利益を謀る」の補説。出張先では客方の好みの

商品を売り切れものがないように準備すること。注文を受けた際は、少量であっても迅速に対応すること。得意先の方から来店した場合は、行儀正しく応接すること。万一、行き違いがあっても大声で言い争わず、担当の上司と相談の上で、不都合のないように取り計らうこと。そうすれば、自然に売上高も増えて利益も増加することを天理としてよく心得ておくこと。

第二条 「元方ならびに定宿の好評を得る」の補説。商品仕入れに赴いた場合は、仕入先に対して値段交渉においては厳しい吟味が必要であるが、支払いは無理な取引をせず、言葉遣いも丁寧な柔和であるべきである。とくに仕入では潮時を因ることが大事であり、緩急をはずさないことが肝要である。また、定宿等においては客顔をせず、相客衆よりへりくだり、必ず無礼な言動は慎むこと。たとえ朝夕の食事内容が粗末であろうとも、あてつけがましい振舞いをせず、無益な些事(ささ)で争わないこと。

第三条 「出立と帰宅」は、出張営業の心得である。掛け取りに出かけた先で、のんびりと長たばこしながら、世間話に時をつ

いやすことは、商談が間延びして差支えが生じ、また出張日限に遅れの出る原因にもなるので、寸暇を惜しんで業務に励み、規定の日限以内に帰店すること。

第四条 「附合ひの心得」は、日常生活の節約の心掛けである。最近では商談交際の必要上ととなえて、出費を厭わない傾向があるのは大いに問題がある。たとえ一身上の祝い事であっても、過分の贅沢はあるまじきことであるのに、若年時に将来の不為も考えず、無益の出費を重ねるようになる、いつとはなく内証の借銭が重なって、その場の口先でとりつくり、あれこれと心乱れて、仕事の務めもおろそかになり、心身ともに萎縮してしまふものである。つまるところは、身から出た錆によって面倒なことに追い込まれ、身を誤るような者も出るようになる。それは極めて残念なことである。今後は、営業上の懇意な得意先であっても、無益で無駄な付き合いや接待は廃止すべきである。

第五条 「病を慎み過を改む」は、病気や身持ちの振舞いに關する条項である。旅先で同僚が病気になったり、好ましくない挙動があれば、仲間内で介抱し

たり、心底からの忠告をしたりして、当人の為を計ること。当の本人も自省して心得違いに気付いたならば、怠慢な先非を悔やみ、共に健康を保ち、名誉を回復できるであろう。本心のある時は悪心なく、悪念のある時は本心なしと弁えることこそ、商売繁盛の基であり、その身の徳となる。支配人の地位に就く者は、これらの理非曲直を若い人々が得心するように、教え諭さねばならない。

第六条 「窮して心を動かさず」は、予期せぬ災厄に出くわしたときの対応について教諭したものである。味わい深い文章なので、現代文表記の読み下し文とその大意を同時に掲げておこう。読み下し文は次の通りである。

惣て物ごと、手がたくいたし候とも、思いの外なる損失来る事あるものに候、古今の歴史に鑑みて知るべし、如何なる因によりてか、道を守る善人も窮する事のあるも世の習いに候へば、その不仕合の重りし時に及びても、常々の心を乱すべからず、必ず道に背き規則を越る等の事あるまじく候、投機商類似を羨むべ

からず、一時に利徳を得んとして、かえって多分の損失を招く事あり、深く恐るべし、商家の極意は、信用を重んじ内外の好評を得るにあり、ただ我身を慎しみ、諸事を約かにし、ますます稼穡をつとむべし、然れば、家内和合して天道に合ひ、氣運徐々に開くへし、永久の心得を相統する人、この理りを知るべし

(意味)

堅実に商売をしていても、予想外の損失をこうむることがある。古今の歴史を見ても分かることである。どのような因縁によつてなのかは分からないが、道をキチンと守る善人であつても窮地におちいることのあるのは世の常である。そのような不幸が重なつた時でも、平常心を失つてはならない。ヤケになつて道に反することをしたり規則を破つたりしてはならない。投機商のような者を真似て一挙に利得を得て挽回しようと企んでも、かえつて損失を大きくするだけである。商家の極意は信用を重んじ内外の好評を得ること

にこそある。進退窮まるような時は、ひたすら身を慎み、儉約に徹しながら、ますます家業に励むことである。そうすれば、

家内一同和合し、天道にも叶い、運氣も徐々に開けるので、時節の到来を待つことが大事である。文末の後文では、次のように締めくくつてゐる。

以上の簡条は先祖の遺訓を平生の心得までに記したものであり、時勢に応じて世間の動向を観察し、油断なく日夜経営の工夫を重ねなければならぬ。初心の謙虚で真剣な想いを忘れるようでは、大成はおぼつかない。一同和合して家業專一に励めば、多くの人の歡心を得て、幸せな人生となるのであり、そうなつてこそ子孫の本意というものである。

「家内申合書」の作成は、塚本一統が成立早々の不安定な明治政府の治世を歓迎して、新時代に即応した体制を固め、大方針を素早く打ち出したことを示している。このような時代の機先を制する判断をもたらし得たアントナテナの背景には、定次、正之兄弟が時勢の変遷の先端を行く浦賀・横浜地方をしばしば往来して実地の見聞を身に着けていたことがある。さらに、定次が明治元年(一八六八)に福沢諭吉の『西洋事情』を読んで大いに啓発を受けていたことや、世上のことには超越していたはずの川並村の領主の大和国郡山藩

主からさへ、世の行く末を案じての危機感から発する諮問を受けたことによつて、時代が一大

11 維新期の波に乗った船場の今太閤

転換期にあることを素早く感知したことが影響したと考えられる。

総合商社の伊藤忠・丸紅の創業者初代伊藤忠兵衛は、安政五年(一八五八)一七歳で九州や中国地方への西国持下り商いと

いう麻布の行商から商界に身を投じた。忠兵衛が西国行商に従事していた当時は、下関戦争や長州征討という世情の騒然とした時代であつた。当然、忠兵衛の商いも大きな影響を受けたが、彼は被害を蒙るよりもむしろ商機として活かしたという、次のような逸話がある。

慶応二年(一八六六)、戦時体制下にあつた長州藩領では、内外の出入りが禁じられ、下関に限つて外来商人の出入りが許されてゐた。下関を得意場としていた忠兵衛は、同年五月中旬に麻布一万反を持ち下り、下関で一〇日間に七割を売り、残りの三割は九州で売り払つた。六月上旬、代金回収のために博多から再び防長へ向かつて乗船し、関門海峡にさしかかつた時、武装した軍勢が小倉から門司の田ノ浦に進軍するのを見た。第二次征長に遭遇したのである。こ

の争乱では、幸いなことに長州側の戦勝気分によつて、忠兵衛の代金回収は順調にいった。ところが七月中旬になると、旅人を下関に留め置くことも、船出させることもできないことになつた。約一五〇〇両の売掛回収金を所持していた忠兵衛は、途方に暮れ、付近の空き家へ他の旅人と一緒に四〇日間余りも閉じこもつてゐた。たまたま同郷の商人三人が長崎から下関付近の彦島に寄港したので知つた忠兵衛は、出かけて行つて回収金全部の託送を依頼した。大金は無事に近江の自宅に届けられ、忠兵衛自身は戦いの終息した後、九月に、残りの売掛金を回収して帰国した(『伊藤忠100年』)。

この逸話は、時代の大きな転換点でありながら、戦乱の渦中にあつても商機を的確にとらえて実行に移す、大商社の創業者らしい忠兵衛の大胆な行動力を示している。同時に、依頼に応じて一五〇〇両もの大金が無事に届けられたことは、商人間に



九州小倉合戦 (第二次征長) のかわら版 (萩博物館蔵)



初代伊藤忠兵衛 (個人蔵)

強い信義のあったことが分かる。慶応三年(一八六七)、兄の長兵衛からの申し出によって、忠兵衛は兄と共同で西国持ち下り商いに従事するが、明治三年に商圏を分割して単独行商に移行することになった。しかし忠兵衛の市場は狭小で不利であり、将来の展望を描けなかったので、自分の商圏をすべて兄に譲って、明治五年(一八七二)一月に、大阪に開店することを決意した。

それが、大阪本町二丁目の商号を「紅忠」(店名前、伊藤忠三郎)と称する呉服太物問屋である。その後の「紅忠」の躍進は目覚ましく、その短期間での躍進ぶりは世の耳目を惹き、「船場の今太閤」と称えられたほどである。事実、忠兵衛一代の資産は、明治三四年(一九〇一)の時点で日本全国五〇万円以上の資産家四一人のうちの一人に目されるまでに急速に増大した(『時事新報』)。この急速な増大は、伊藤忠研究の最大の謎である。

忠兵衛自身は大阪に開店したことを、競争相手のひしめく商いの牙城に旗揚げして、大成を狙う乾坤一擲の大勝負であった、と述懐している。忠兵衛の個人的な心情による大阪出店をより大きな視点からすれば、維新後

の大坂での株仲間体制の動揺解体をビジネスチャンスととらえて、出店を図る近江商人団の大きなうねりの一環であった。大阪では明治二年一二月に内外交易の自由が宣言され、同五年四月に株仲間の解放、廃止が実施された。その結果、商法と取引は極度に乱脈となったので、旧株仲間と気脈を通じる同業組合が台頭し、明治六八年の間に多数の組合ができた。明治七年一月に、昔からの船場呉服問屋を壱番組と称し、店舗に足りない仲買商は式番組に分けられた。呉服商壱番組規則の第一条によって、旧株仲間の規約を廃することを宣言している。

また、関東織物卸商組合の構成メンバー一店には、次の七名の近江商人が含まれていた。西川甚五郎・小泉重助・阿部市郎兵衛・外村市郎兵衛・市田弥一郎・伊藤忠兵衛・西村健次郎である。

設立時の呉服壱番組の成員一九名のうち、近江商人を店名前で挙げると、立木森之助(小泉新助)・外村与七郎(外村与左衛門)・稲西庄兵衛・塚本武右衛門・伊藤忠三郎(伊藤忠兵衛)・阿部元太郎(阿部市郎兵衛)等を含み、近江商人が過半数の一名を占めている。

小泉新助・重助の小泉一統、外村与左衛門・市郎兵衛の外村一統・阿部市郎兵衛家は、呉服壱番組と関東織物卸商組合の両方に名前を連ねている。これらの著名な老舗の近江商人と並んで伊藤忠兵衛も両方の組合に名前が挙がっている。とくに、阿部一統と小泉一統による大阪出店開設は明治四年であり、伊藤忠兵衛の明治五年(一八七二)一月の大阪開店とほとんど同時である。株仲間の解放・廃止によって、新参の近江商人も船場呉服問屋の壱番組に参入できたのである。

このような近江商人団の大阪進出を明治三六年(一九〇三)刊の『大阪府誌』は、慶応三年(一八六七)の頃は、関東織物のみを扱う問屋業には、外村与左衛門の出店と稲西庄兵衛があるばかりであったが、維新の際、江州人の入来たりて更に開業せしより、今は二十名以上に達せりといふ」と述べ、維新後から関東呉服を扱う近江商人の大阪進出が著しかったことについている。こうしたことを考え合わせると、忠兵衛の一大決心による大阪開店は、明治維新期の波に乗った近江商人団の大阪進出という大きな背景のあったことが読み取れるのである。

三方よし講座

小泉創業の地に学ぶ

小泉グループ創業家「小泉重助」本宅と愛知川の近江商人ゆかりの地の見学

◦日時 令和3年10月3日(日)

◦場所 小泉重助家(東近江市五個荘山本町)、近江上布産業会館、愛知川ふれあい本陣

屋敷修復に大活躍された
小泉陽助さん

手入れが行き届いたお庭

毎回多くの皆様のご期待いただいている三方よし講座ですが、コロナ禍ということで、今回は、会員のみで募集を行いました。参加者20名は能登川駅に集合し、バスで五個荘山本の小泉邸に向かいました。バスが到着したのは小泉家の氏神さんでもある百々矢神社。陶芸家として活躍の小泉美恵さんの出迎えを受け、小泉家に到着。

小泉家の三男として生まれ、アメリカで仕事をされていた陽助さんが、廃屋寸前だったこの屋敷の大修理に長年取り組まれたお蔭で、立派に蘇りました。創業地を思う陽助さんの格闘の結果、小泉グループでも創業家保存に向けた体制が整ったのでした。



近江麻の織機

した座敷で早速、財団法人近江商人歴史保存会理事長の奥野純彦様のご登壇、京都小泉株式会社取締役相談役であった奥野様からは、先代、先々代の経営姿勢、小泉イズムのようなことにもふれていただき経営現場の様子をお話いただきました。そして、近江商人博物館学芸員上千恵さんからは小泉の歴史を紹介いただき、最後には、陽助さんの涙ぐましい家屋修復の経過報告をいただきました。



日野町ご出身で小泉重助本宅に入社された奥野純彦氏

小泉家をあとにして、愛知川では、近江商人の代表的な扱い商品である麻布について大変興味深いお話を聞きました。湖東商人とひとくくりにされるものの、五個荘、豊郷、愛知川、それぞれに商いの背景や手法が異なることをさらに追及したいものだと感じた今回の三方よし講座でした。ご参加の皆さんありがとうございました。(事業委員長 田中恵理子記)



近江商人博物館の上平千恵さん

緊急事態宣言が解除され、次第に平常が戻ってきた昨今、今度はウィズコロナのあり方が問われるようになってきました。こうした時代に近江商人はどのような行動をしたのか、末永國紀先生の続編を掲載しました。

てんびん棒

先だって、東証一部上場の人材会社様からのご要請で幹部4名様を、滋賀大学史料館に始まり、豊郷、五個荘、近江八幡をご案内しました。「三方よし」は何となくわかっているが、本当はなんだという答えを見つげるためのご来県で、滋賀での学びがこれからのビジネスに必要だとのことで、皆さん真剣でした。それだけにご案内にも力が入ったのですが、何事にも貪欲で真剣なまなざしに、こちらも学ぶことが多い2日間でした。その後、参加者のおひとりのFBに「三方よし」の考え方は、近江から遠く離れた見知らぬ土地でよそ者扱いされる中で、何代にもわたって『商いと？』を問い続けて磨かれたものだと思う。必要とされ続けるためには、独占ではなく共有。分断ではなく融合。支配ではなく支援していくことを第一とした近江商人。天下を獲りに行く大阪商人や江戸商人の華やかさや豪快さとはまた違う、未来永劫続くことを目指した商売人の魂を感じた旅でした。」とうれしい感想が記載されていました。